

12/14 Tue.

第613回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 613 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

モーツァルト
Mozart

ショパン
CHOPIN

[休憩]
[Intermission]

プロコフィエフ
PROKOFIEV

高関 健 *-p.5*
KEN TAKASEKI

小林愛実 *-p.7*
AIMI KOBAYASHI

小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

歌劇〈イドメネオ〉序曲 [約5分] *-p.12*
"Idomeneo" Overture

ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11 [約43分] *-p.13*
Piano Concerto No. 1 in E minor, op. 11

I. Allegro maestoso
II. Romanze: Larghetto
III. Rondo: Vivace

交響曲 第5番 変口長調 作品100 [約46分] *-p.14*
Symphony No. 5 in B flat major, op. 100

I. Andante
II. Allegro marcato
III. Adagio
IV. Allegro giocoso

※当初の発表から出演者および曲目の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

12/18 Sat.

第243回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 243 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

12/19 Sun.

第243回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 243 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

※12/20、22公演については、次ページをご覧ください。

12/23 Thu.

第648回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No. 648 / Suntory Hall 19:00

12/24 Fri.

第31回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No. 31 / Festival Hall 19:00

指揮
Conductor

ジョン・アクセルロッド *-p.6*
JOHN AXELROD

※他の出演アーティストは次ページをご参照ください。
※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

ベートーヴェン
Beethoven

交響曲 第9番 二短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] *-p.16*
Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

I. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
II. Molto vivace
III. Adagio molto e cantabile
IV. Presto – Allegro assai

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）（12/18、19）
協賛：非破壊検査株式会社（12/24）、大和ハウス工業株式会社（12/24）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会（12/18、19、23）
協力：コジマ・コンサートマネジメント（12/24）

※24日の公演は、大阪府・大阪市からの負担金を活用した大阪文化芸術創出事業実行委員会の補助金を受けて実施致します。

12/20 Mon.

〈第九〉特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール 19時開演
SPECIAL CONCERT / Tokyo Metropolitan Theatre 19:00

12/22 Wed.

SHINRYO Presents 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール 19時開演
SPECIAL CONCERT, presented by SHINRYO / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ソプラノ
Soprano
アルト
Alto
テノール
Tenor
バス
Bass
合唱
Chorus
合唱指揮
Chorusmaster
コンサートマスター
Concertmaster

ジョン・アクセルロッド -p.6

JOHN AXELROD

中村恵理 -p.7

ERI NAKAMURA

藤木大地 -p.8

DAICHI FUJIKI

小堀勇介 -p.8

YUSUKE KOBORI

妻屋秀和 -p.9

HIDEKAZU TSUMAYA

新国立劇場合唱団 -p.9

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

富平恭平 -p.10

KYOHEI TOMIHIRA

林 悠介

YUSUKE HAYASHI

【第1部】〈オルガン・ソロ〉

オルガン

Organ

J. S. バッハ

J. S. Bach

J. S. バッハ

J. S. Bach

〔休憩〕

[Intermission]

【第2部】〈第九〉

ベートーヴェン

Beethoven

交響曲 第9番 二短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] -p.16

Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

※詳細は前ページをご参照ください。

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

特別協賛：新菱冷熱工業株式会社 (12/22)

協賛：NTTコミュニケーションズ株式会社 (12/20)

助成：文化庁子供文化芸術活動支援事業 (12/20)

事業提携：東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団) (12/20)

※12月20日公演では日本テレビの収録が行われます。

指揮

高関 健

KEN TAKASEKI, Conductor

楽壇きつての知性派が
プロコフィエフの神髄に迫る



©読響

緻密なスコアの分析からスケールの大きな音楽を作る知性派指揮者。

1955年東京生まれ。桐朋学園大学を卒業後、ベルリンでカラヤンのアシスタントを務め、タングルウッド音楽祭でもバーンスタイン、小澤征爾らに指導を受けた。日本のオーケストラはもとより、ベルゲン響、ウィーン響、オスロ・フィル、ベルリン・ドイツ響、ケルン放送響などに客演。2013年と17年にはサンクトペテルブルク・フィル定期演奏会を指揮、聴衆や楽員から大絶賛を博した。マイルスキー、パールマン、アルゲリッチ、ブーレーズら世界的ソリストや作曲家からも絶大な信頼を得てきた。

これまで広島響音楽監督・常任指揮者、新日本フィル正指揮者、大阪センチュリー響常任指揮者、群馬響音楽監督（現・名誉指揮者）、札幌響正指揮者、京都市響常任首席客演指揮者などを歴任し、現在、東京シティ・フィル常任指揮者、仙台フィルレジデント・コンダクター、富士山静岡響首席指揮者、東京芸大音楽学部指揮科教授兼芸大フィル首席指揮者を務める。11年齋藤秀雄メモリアル基金賞、18年サントリー音楽賞などを受賞。

19年3月、ウラジオストクとサンクトペテルブルクで、『ロシアにおける日本年』の一環として團伊玖磨のオペラ『夕鶴』を指揮して日本とロシアの文化交流に大きな役割を果たし、21年4月には新国立劇場でストラヴィンスキー〈夜鳴きうぐいす〉とチャイコフスキー〈イオランタ〉を指揮し、高い評価を得た。今年9月には、読響でマーラーの交響曲第4番などを振り、絶賛された。NHK等の番組にも定期的に出演するなど、幅広い活動を続けている。

12/14
定期

Maestro

12/18

12/24

〈第九〉公演

Maestro

指揮

ジョン・アクセルロッド

JOHN AXELROD, Conductor

**欧米で活躍するカリスマが
〈第九〉に熱い想いを込める**

©Stefano Bottesi

巨匠バーンスタインの薫陶を受け、カリスマ性のある音楽作りで国際的に活躍する俊英が、年末恒例の〈第九〉で読響初登場。人類愛を高らかに謳ったベートーヴェンの最高傑作に熱い想いを込める。

1966年ヒューストン生まれ。88年ハーヴァード大学を卒業、指揮をバーンスタインとムーシンに学ぶ。これまでに、スイスの名門ルツェルン響および歌劇場、フランス国立ロワール管、スペイン王立セビリア響の音楽監督、ミラノ・ヴェルディ響の首席客演指揮者などを歴任。2020年から京都市響首席客演指揮者を務めている。またシカゴ響、バイエルン放送響、北ドイツ放送響、ロサンゼルス・フィル、ベルリン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、パリ管、ロンドン・フィル、ドレスデン・フィル、フランス国立リヨン管、フィルハーモニア管など、150以上の世界各地の名だたる楽団を指揮し、たびたび再招聘されている。

オペラでも意欲的な活動を展開しており、ルツェルン歌劇場では、数多くの上演で好評を博した。プレゲンツ音楽祭でのクルシェネク〈聖シュテファン大聖堂の周りで〉はDVDでリリースされ、話題を呼んだ。パリ・シャトレ座、ミラノ・スカラ座でのバーンスタイン〈キャンディード〉(カーセン演出)、アンジェ＝ナント歌劇場でのワーグナー〈トリスタンとイゾルデ〉(ピィ演出)などの成功は特筆される。20年6月、コロナ禍のもと開催したブッチーニ音楽祭で〈ジャンニ・スキッキ〉を振り、注目を集めた。現代作品にも積極的に取り組み、ファン・デル・アー、サーリアホ、ヴィトマンら同時代作曲家の初演を手掛けている。



©Makoto Nakagawa

ピアノ

小林愛実

AIMI KOBAYASHI, Piano

今年10月、ショパン国際ピアノコンクールで第4位に入賞し、大きな話題を呼んだ新鋭ピアニスト。1995年山口県宇部市出身。3歳からピアノを始め、7歳でオーケストラと共演、9歳で国際デビューを果たす。2006年、10歳で読響と初共演し注目を浴びた。10年に14歳でCDデビューし、サントリーホールでリサイタルを開催。これまでにチューリヒ・トーンハレ管、18世紀オーケストラをはじめ国内外の多くの楽団と共演。18年8月には、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭に出演し好評を博す。18年からワーナー・クラシックスと契約。今年8月にリリースしたCD「ショパン：前奏曲集 他」は、レコード芸術誌で「特選盤」に選ばれる。現在、フィラデルフィア・カーティス音楽院で、マンチェリウのもと研鑽を積んでいる。

世界の一流歌劇場で活躍する実力派。大阪音楽大学、同大学院修了。新国立劇場オペラ研修所を経て、2008年英国ロイヤル・オペラにデビュー。A. ネットレブコの代役として出演し一躍脚光を浴びた。10～16年、バイエルン国立歌劇場のソリストとして専属契約し、〈魔笛〉〈愛の妙薬〉などで主要キャストを務める。これまでS. ヴァイグレ、A. パッパーノ、K. ペトレンコらの指揮で、ベルリン・ドイツ・オペラ、ワシントン・ナショナル・オペラ、ザルツブルク州立歌劇場などに客演。16年には〈チェネレントラ〉のクロリンダでウィーン国立歌劇場にデビュー。21年はNHKニューイヤーオペラコンサートのほか、12月には新国立劇場〈蝶々夫人〉に題名役で出演。2015年度芸術選奨文部科学大臣新人賞ほか受賞多数。読響初登場。



ソプラノ

中村恵理

ERI NAKAMURA, Soprano

12/14

定期

Artist

12/18

12/24

〈第九〉公演

Artist

12/18

12/24

〈第九〉公演

Artist



©chiromas

アルト (カウンターテナー)

藤木大地

DAICHI FUJIKI, Alto

バロックから現代作品まで幅広いレパートリーで、日本が世界に誇る国際的アーティスト。2017年ウィーン国立歌劇場にライマン〈メディア〉ヘロルド役で鮮烈にデビューし、現地メディアから絶賛された。20年東京文化会館にて企画原案・主演をつとめた新作歌劇〈400歳のカストラート〉が大成功をおさめた。また、同年新国立劇場のブリテン〈夏の夜の夢〉オーベロン役、バッハ・コレギウム・ジャパンのヘンデル〈リナルド〉の題名役を務め、圧倒的な存在感で聴衆を魅了。今年8月には新国立劇場にて世界初演された〈スーパーエンジェル〉で主演を務め話題を呼んだ。11月にはCD「いのちのうた」をリリース。国内の主要オーケストラとの共演のほか、各地でのリサイタルが好評を博す。読響初登場。

12/18

12/24

〈第九〉公演

Artist

2019年日本音楽コンクールで優勝し、瑞々しい歌声で注目を浴びる新星。福島県出身。国立音楽大学卒業、同大学院修了。静岡国際オペラコンクール入賞、東京音楽コンクール第2位など受賞多数。文化庁新進芸術家海外研修生としてイタリア在学中に、ペーザロのアカデミア・ロッシニアーナに参加。A. ゼツダのもとで研鑽^{けんさん}を積んだ。16年に同地のロッシニ・オペラ・フェスティバルでの〈ランスへの旅〉リーベンスコフ伯爵に抜擢され、成功を収めた。チロル祝祭歌劇場〈アルジェのイタリア女〉リンドーロで欧州デビューを飾り、メドック音楽祭、バチカン音楽祭などに出演。帰国後はびわ湖ホール〈連隊の娘〉をはじめ、藤原歌劇団〈ランスへの旅〉、日生劇場〈愛の妙薬〉などに出演し、好評を博す。読響とは19年12月以来、2回目の共演。



テノール

小堀勇介

YUSUKE KOBORI, Tenor



バス

妻屋秀和

HIDEKAZU TSUMAYA, Bass

深く力強い声と明晰なドイツ語の発声で高い評価を得ている国際的バス。東京芸術大学卒業、同大学院修了。イタリア留学を経て、1994年から2001年までライブツィヒ歌劇場、02年から11年までワイマール歌劇場の専属歌手を務めた。ベルリン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、新国立劇場などに客演し、日本を代表するバスとしての名声を確立した。18年にはデビュー30周年を迎え、これまでにヴェルディ〈アイダ〉のランフィス、ベートーヴェン〈フィデリオ〉のロッコなど出演したオペラは国内外を合わせて1000回を超える。読響とは14年、16年、17年、19年の〈第九〉のほか、17年11月〈アッシジの聖フランチェスコ〉では兄弟ベルナルド役で共演して好評を博した。ジローオペラ賞、ロシア歌曲賞受賞。二期会会員。

合唱

新国立劇場合唱団

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS, Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演。特にラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、ショスタコーヴィチ〈バビヤール〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

12/18

12/24

〈第九〉公演

Artist

12/18

12/24

〈第九〉公演

Artist

12/18
-
12/24
〈第九〉公演

Artist



合唱指揮

富平恭平

KYOHAI TOMIHIRA,
Chorusmaster

東京都出身。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場等のオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティートルを務めた。これまでに、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈ルル〉など、多数のオペラを手がけてきた。読響とは、2017年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉、19年の〈バビ・ヤール〉で新国立劇場合唱団の合唱指揮を務め、好評を博した。群馬響、東京シティ・フィル、東京フィル、東京響などにも客演。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフなどを経て、19年4月に新国立劇場合唱指揮者に就任。洗足学園音楽大学非常勤講師。

12/20
12/22
〈第九〉
特別演奏会
【第1部】

Artist

東京女子大学文理学部卒業後、東京芸術大学音楽学部器楽科オルガン専攻卒業。同大学院音楽研究科修士課程を修了。渡仏後、パリ地方音楽院で研鑽を積み、演奏家課程を満場一致の最優秀で修了。これまでにオルガンを湊恵子、三浦はつみ、廣野嗣雄、廣江理枝、クリストフ・マントゥに、チェンバロを大塚直哉、鈴木雅明、ノエル・スピートにそれぞれ師事。2013年にフランスのピアリッツでのアンドレ・マルシャル国際オルガンコンクールにて優勝。帰国後もヨーロッパ、ロシアで演奏ツアーなど、国内外で幅広い演奏活動を行う。19年7月、キングインターナショナルからCD「Joy of Bach」をリリース。今年4月から神奈川県民ホールオルガン・アドバイザーを務め、10月に就任記念リサイタルを行い、絶賛された。日本オルガニスト協会会員、日本オルガン研究会会員。



©T. Tairadate

オルガン

中田恵子

KEIKO NAKATA, Organ

モーツァルト 歌劇〈イドメネオ〉序曲

オペラ草創期の作曲家モンテヴェルディが依拠した芸術思潮は、「言葉が音楽の主人になる」という彼自身のひとことに現れている。言葉の意味を克明に表すためであれば、音楽が旧来の規則に背いてもよい。そのような観点から音楽を徹頭徹尾、言葉に従わせた結果、モンテヴェルディは逆説的ながら、音楽に豊かな表現力を付与することに成功する。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）も同様のオペラ観を持つ。正確にいうと、モンテヴェルディとは正反対の方向から同じ結論に至った。モーツァルトにとってオペラの主演はいついかなるときも音楽だった。音楽をいきいきと書くために、台本を研究する。詞章に深く分け入り、そこに適切な音楽表現を与える。モーツァルトは結果として、言葉の織りなすドラマを大切にしていた。

1780年から81年にかけて書いた〈イドメネオ〉のための序曲はまさに、作曲家のそうした視点から生み出されたものだ。序曲はオペラの物語や性格を反映しなければならぬ、とはグルックの主張だが、モーツァルトはこの序曲でそれを体現してみせる。

〈イドメネオ〉は、3つあるモーツァルトのオペラ・セリア（シリアスな内容の歌劇）の内、2番目の作品。クレタの王イドメネオは、海神に息子イダマンテの命を差し出す約束をして海難を逃れる。王の悩み、王子の自己犠牲、そこに王女たちの愛と嫉妬が絡みつく。

モーツァルトは次のように「オペラの物語」を序曲に反映させた。

冒頭、威厳を表す総奏の後、第9小節に木管群による「ファームレドド」（階名）の順次下行音型が姿を現す。これは「犠牲」や「イダマンテ」を象徴するモチーフとしてオペラ全体に登場する。序曲はこの順次下行音型を主題に、ぎゅっと目の詰まったソナタ形式をとる。イダマンテのテーマを提示・展開・再現して結尾へと進む音楽は、王子の運命をそのまま映しているかのように響く。〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1780～81年、ザルツブルクとミュンヘン／初演：1781年1月29日、ミュンヘン／演奏時間：約5分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ショパン ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

1830年10月11日、フレデリック・ショパン（1810～49）は自作の個展演奏会をワルシャワで催した。ピアノ協奏曲ホ短調は、作曲家がこのコンサートで披露した作品のひとつだ。

ショパンは演奏会に先立ち、弦楽四重奏の伴奏でこの協奏曲を練習した。32年2月にパリでこの曲を弾いたときは、ピアノ六重奏の編成でステージにあがったという。このパリの演奏会では室内楽編成ですらなく、管弦楽部分を鍵盤に移したピアノ独奏版で協奏曲を弾いた可能性さえある。

ピアノと弦楽四重奏2組、そこにコントラバスを加えた十重奏版を32年、作曲家自身が用意していたことも伝えられる。33年には同作品のフランス初版とドイツ初版を出版。両初版には「管弦楽伴奏付」「五重奏伴奏付」「ピアノ独奏用」の3種類があった。

ショパンが室内楽編成も想定しつつ、ホ短調協奏曲を書いたことはまちがいない。そのことはピアノの独奏声部の様子にもあらわれる。この作曲家特有の細やかな装飾音は、第1協奏曲のソロ・パートでも確かな輝きを放っている。こうした装飾音は本来、サロンのような小さな会場でそっと耳を傾げるもの。その音の身振りはきわめて親密だ。音楽書法、演奏実践、楽譜出版のいずれの点からもショパンが、室内楽的な響きをホ短調協奏曲の根本に据えていることが分かる。

第1楽章では冒頭、管弦楽の総奏がしばらく続き、しかるのちにピアノ独奏が登場する。独奏が登場すると管弦楽はほぼ沈黙。総奏部では入れ替わりに管弦楽が朗々と響く。古典的な装いである。

第2楽章では、弱音器付きの弦楽に導かれて独奏ピアノが叙情的に登場する。ショパンはこのロマンツェ楽章を指して「懐かしい場所をじっと見つめるイメージ」と手紙に書いている。

第3楽章はポーランドの舞曲「クラコヴィアク」を下敷きとする。2拍子系の律動はすばやく、つねに前へ前へと進む力強さを持つ。 〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1830年／初演：1830年10月11日、ワルシャワ／演奏時間：約43分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

プロコフィエフ 交響曲 第5番 変口長調 作品100

革命を嫌気してロシアを離れたセルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)は、日本を経由してアメリカ(18年)、さらにはフランス・パリ(22年)へと流れ着いた。里心にとらわれたのはそのころ。準備を徐々に調べ1936年、ソヴィエト連邦となっていた故郷に完全帰国した。

この伝記的事実と作曲家の交響曲創作史とを重ね合わせてみよう。プロコフィエフは1902年に処女作を、サンクトペテルブルク音楽院在学中の08年に2作目の交響曲を書いたが、いずれも破棄。通算3作目となる第1番〈古典的〉を、16年から17年にかけて作曲する。プロコフィエフはハイドンの様式を借りた上で、この作品に当世風の書法を盛り込んだ。これは“ロシア風の交響曲”を避けようとする姿勢の表れでもある。

作曲家は第2番をパリで書いた。24年から25年にかけてのことだ。アレグロと変奏曲とからなる二楽章の装いには、オネゲルらとの接触が影響しているかも知れない。それから3年ほどして作曲家は、第3番(28年)と第4番(29~30年)を立て続けに書き上げる。いずれも自作のバレエ音楽を編み直した作品だ。

1927年の一時帰国を皮切りに、29年、33年とプロコフィエフは故国に足を運ぶ。というのも、音楽院の同窓生にして親友でもあるミャスコフスキーの、たっでの願いがあったからだ。結果として36年、家族ともどもソ連への移住を果たした。

それから8年、国家を代表する音楽家として“公的な仕事”に従事する中でプロコフィエフは、第5番を生み出す。作曲家は、第4番までの交響曲では作品のロシア化を避ける一方で、第5番からはそのソ連化を厭わなかった。というより、それこそがこの国で生き抜く術だったのだ。

とはいえ、そういった事情が第5番を矮小化することはなかった。前作から14年、完全に抽象的なシンフォニーに取り組むのは第2番以来、実に19年ぶりのことだ。作曲家自身はこの作品を「長年の創作活動の頂点、人間精神の偉大さを表した交響曲」と述懐している。

集中的な取り組みは1944年。素材の中には30年代にさかのぼるものもある。初演は45年1月13日、モスクワにて、作曲家自身の指揮による。演奏会は大成功

を収めたが、プロコフィエフは以後、公のステージに立つことはなかった。コンサート直後に転倒、脳震盪^{のうしんとう}を起こし、その後遺症に悩まされるようになってしまったのだ。こうした不運により、結果として第5番が、以後も含めた作曲家の交響曲創作史におけるクライマックスとなった。

第1楽章の冒頭主題は実に味わい深い。まずは音程。ソからド(階名。以下同様)への完全四度上行、ドからソへの完全五度上行の方向をはっきりと打ち出す。付点の弾むリズムが耳をひくが、そのリズムのところで音を矯めてから跳躍させる。この“足を引っ張られても上へ”という意識が以下、全楽章を通しての鍵となる。

いわゆるスケルツォの**第2楽章**で作曲家は、上行と下行の相反する運動性を、伴奏音形においても主旋律においても、さまざまな手練手管で対置する。スケルツォはその後、上下行の勝負を膠着させたまま、一気に幕を下ろす。

第3楽章に入ると一見、上行の運動性が優位に立ったように感じられるが、下行の力動もしぶとく上行の“足を引っ張る”。結尾部でも上に進むクラリネットの線と、なだらかに底に沈むベースラインとが抗ったまま。両者の争いは最終楽章まで持ち越される。

第4楽章は、全楽章の鍵となる第1楽章冒頭主題を序奏に置く。主部はスケルツォ同様に軽快だが、上行下行の運動性が相変わらず主導権争いを繰り広げる。割り込んでくる打楽器がまさに軍楽隊の鼓舞を思わせる。その後、大勢は決し上行運動が支配的となって、走り去るように作品は幕を下ろす。

「上行の勝利」は社会主義リアリズムの思潮に沿ったものであるが、“足を引っ張る下行運動”をしぶとく粘らせるあたりに、当時のソ連作曲家の身上/心情を見ないでもない。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1944年／初演：1945年1月13日、モスクワ／演奏時間：約46分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、タンブリン、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、銅鑼、ウッドブロック)、ハープ、ピアノ、弦五部

12/18

12/24

〈第九〉公演

Program Notes

ベートーヴェン

交響曲 第9番 二短調 作品125 〈合唱付き〉

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は生涯に九つの交響曲を書いた。そのすべてが交響曲の歴史における輝かしい金字塔であり、とりわけ最後の交響曲第9番〈合唱付き〉はオーケストラに加えて、独唱、合唱までを要する異例の大作となった。以来、後世の多くの作曲家たちは9番目の交響曲を作曲する際に、ベートーヴェンを意識せざるをえなかったはずである。9という数字は交響曲の創作史におけるマジックナンバーといってもいい。

もっとも、ベートーヴェンの交響曲が9曲に終わったのは、たまたまというほかない。ほんのわずかでも作曲家の運命が違っていれば、交響曲第8番や交響曲第10番が最後の交響曲であってもおかしくはなかっただろう。ベートーヴェンの56年あまりにわたる生涯のなかで、交響曲の創作期間は決して長くはない。交響曲第1番が完成されたのは1800年。交響曲第8番は1812年。この12年間に8曲の交響曲が集中的に書かれている。だが、1812年の第8番から1824年の〈第九〉までにはさらに12年間のブランクがある。〈第九〉は季節外れの交響曲と呼びたくなるほど作曲時期が異なっており、もはや書かれなかったかもしれない交響曲が、最後に奇跡的に絞り出されたかのような印象すら受ける。

交響曲第8番から5年後となる1817年、ベートーヴェンはロンドンのフェルディナント・リースから手紙を受け取る。手紙にはロンドン・フィルハーモニー協会のために新作交響曲を2曲書いて訪英してほしいと記されていた。ベートーヴェンはこれをいったんは受諾する。このプランが実現していれば、ベートーヴェンはロンドンで交響曲第9番と第10番を披露していたことになる。

しかし、この訪英が実現することはなかった。ベートーヴェンは後に自身の健康状態のため取りやめざるをえなかったと説明している。加えて、この時期、ベートーヴェンは甥カールの問題に心を砕かなければならなかった。1815年末にベートーヴェンの弟のカスパル・カールが世を去った際、その遺書には9歳の息子カールの共同後見人としてベートーヴェンと母親ヨハンナが指名されていた。甥カールに対して父親としての責任を負うことを望んだベートーヴェンは、ヨハンナはカールの養育者には不適當であると訴え、4年半にわたる法廷闘争に消耗させられるこ

ととなった。1818年にはカールの素行不良による退学処分や、出奔して母親のもとに駆け込むといった事件が起き、独身者ベートーヴェンがよもやの「家庭問題」で翻弄されることになる。当時の日記に心情が綴られている。

「神よ、私が愛しいカールのためによかれと思ってしたことが、他人を苦しめなければならぬこの心の痛みをおわかりでしょう。聖なる御身よ、耳を傾けたまえ。すべての生ける者たちのなかでもっとも不幸なこの私に」

1822年、ロンドン・フィルハーモニー協会からふたたびベートーヴェンに交響曲の作曲依頼が届く。今度こそ9番目の交響曲が書かれることになる。1824年に作品が完成されると、ウィーンの人々からベートーヴェンの新作交響曲をウィーンで初演してほしいという嘆願書が作曲家のもとに届けられた。ベートーヴェンはこれに同意し、ケルトナートーア劇場での初演が決まった。初演では、客席から熱狂的な喝采が寄せられた。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ウン・ポコ・マエストーソ。神秘的なトレモロから主題の断片が垣間見え、やがて頂点で全貌をあらわす。あたかも混沌から秩序が生まれるかのような劇的な幕開け。

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ。激しく煽り立てるようなスケルツォの間にひなびたトリオがはさまれる。ティンパニの活躍が印象的。

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ。天上の音楽を思わせる長大な緩徐楽章。平安と瞑想はやがて金管楽器の強奏による突然の呼びかけで遮られる。

第4楽章 プレスト〜アレグロ・アッサイ。轟音とともに開始され、先の三つの楽章が回想された後、「歓喜の歌」の主題があらわれる。バス独唱に誘われて、合唱がシラーの詩による「歓喜に寄す」を高らかに歌う。トルコ風行進曲、トロンボーンを伴った荘重な教会音楽風の合唱、二重フーガなど、次々と多様なスタイルを巡りながら、爆発的な終結部へと向かう。 〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1818年頃~24年/初演：1824年5月7日、ウィーン、ケルトナートーア劇場/演奏時間：約65分
楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル)、弦五部、独唱(ソプラノ、アルト、テノール、バス)、合唱

12/18

12/24

〈第九〉公演

Program Notes

12/18

12/24

〈第九〉公演

Program Notes

第4楽章
An die Freude
「喜びに」

訳：金子哲理

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere!

おお 友よ この調べではない!
さらに心地よく 喜びにあふれる歌を とともに歌おう!

Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum!

喜び! 神の^{ひかり}閃光 天国の乙女たち!
私たちは 炎に酔いしれて 天国の汝の聖地に 歩を進める!

Deine Zauber binden wieder, Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder, Wo dein sanfter Flügel weilt.

時の流れに激しく引き裂かれた者も 神の不思議な力によって 再び結びつき
神の柔らかな翼のある場所で すべての人々は 同胞となる

Wem der große Wurf gelungen, Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen, Mische seinen Jubel ein!

ひとりの心の友を持つ 心優しい妻を得る
こうした幸福を得た者は 喜びに唱和せよ!

Ja, wer auch nur eine Seele Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle Weinend sich aus diesem Bund!

そうだ、この地上にひとりでも 魂の友を持つ者も とともに歌おう
そして、それが叶わぬ者は 涙とともにこの輪から離れよ

Freude trinken alle Wesen An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen Folgen ihrer Rosenspur.

すべての被造物は 自然の乳房から喜びを飲み
善人も 悪人も みな 創造主の薔薇の小路をたどる

Küsse gab sie uns und Reben, Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben, Und der Cherub steht vor Gott.

神は 接吻と 葡萄酒と そして 死の試練をくぐった友を 与え給うた
虫にさえも神は快樂を与えた そして天使ケルビムは 神の前に立つ

Froh, wie seine Sonnen fliegen Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn, Freudig wie ein Held zum Siegen.

喜びよ 太陽が広い空を 神の定めに従って駆けるように
同胞よ! 自らの道を喜びをもって進め! 英雄が勝利に向かって 走るように!

Seid umschlungen Millionen! Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! überm Sternenzelt Muß ein lieber Vater wohnen.

抱き合おう! 幾百万の人々よ! この接吻を全世界に!
同胞よ! 星々の彼方に 父なる神は住み給う!

Ihr stürzt nieder, Millionen? Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt! Über Sternen muß er wohnen.

幾百万よ ひれ伏したか? 人々よ 創造主を感じるか?
星々の天幕に 神を求めよ! 星々の彼方に 神は住み給う!

J. S. バッハ
小フーガ ト短調 BWV578

あらゆるフーガのなかでもっとも広く親しまれているのはこの作品かもしれない。初めて耳にしたフーガが、中学校の音楽の授業で鑑賞したこの小フーガト短調だったという方も多いだろう。冒頭で端整なフーガ主題が奏でられると、これを追いかけるように第2の声部が主題を模倣する。やがてペダル(足鍵盤)も加わって、麗麗な4声のフーガがくりひろげられる。「小フーガ」の愛称は同じト短調の「幻想曲とフーガ」BWV542と区別するために付けられた。

J. S. バッハ
トッカータとフーガ ニ短調 BWV 565

ヨハン・セバ스티アン・バッハ(1685~1750)の全作品のなかでも、もっとも広く知られるのが、このトッカータとフーガニ短調だろう。冒頭部分はあまりに有名。もっとも、この曲がいつどういった経緯で書かれたのかはわかっていない。若々しい情熱がほとばしる楽想は、アルンシュタット時代の青春期の作品であるとする見方に合致するが、一方で作品様式の違いからバッハの真作ではないとする説も根強い。重厚で決然としたトッカータにフーガが続く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

【J.S. バッハ：小フーガ】作曲：不明／初演：不明／演奏時間：約5分

【J.S. バッハ：トッカータとフーガ】作曲：不明／初演：不明／演奏時間：約10分

12/18

12/24

〈第九〉公演

Program Notes

12/20

12/22

〈第九〉
特別演奏会
【第1部】

Program Notes